

略 歴

平成 27 年 10 月 1 日現在

ふり 氏 名	おおむら 大村 智	生年月日	昭和 10 (1935) 年 7 月 12 日 (80 歳)
現 職 (専門分野)	学校法人北里研究所 顧問 北里大学 特別荣誉教授 (天然物有機化学)		
国 籍 (本 籍 地)	日本 (山梨県)		
学 位	昭和 43 年 (1968) 3 月 薬学博士 (東京大学) 昭和 45 年 (1970) 10 月 理学博士 (東京理科大学)		
経 歴	<p>昭和 29 (1954) 年月 山梨県立韮崎高等学校卒業</p> <p>昭和 33 (1958) 年 3 月 山梨大学学芸学部自然科学科卒業</p> <p>昭和 38 (1963) 年 3 月 東京理科大学大学理学研究科修士課程修了</p> <p>昭和 38 (1963) 年 4 月 山梨大学工学部学部発酵生産学科助手</p> <p>昭和 43 (1968) 年 4 月 北里大学薬学部助教授</p> <p>昭和 50 (1975) 年 4 月 北里大学薬学部教授</p> <p>昭和 59 年 (1984) 5 月 (社) 北里研究所理事・副所長</p> <p>平成 2 年 (1990) 6 月 (社) 北里研究所理事・所長</p> <p>平成 13 年 (2001) 4 月 北里大学北里生命科学研究所教授</p> <p>平成 20 年 (2008) 4 月 (学) 北里研究所名誉理事長</p> <p>平成 24 年 (2012) 7 月 (学) 北里研究所顧問</p> <p>平成 25 年 (2013) 3 月 北里大学特別荣誉教授</p>		
受 賞 歴	<p>昭和 60 (1985) 年 9 月 ヘキストルセル賞 (米国微生物学会)</p> <p>昭和 61 (1986) 年 4 月 日本薬学会賞</p> <p>昭和 63 (1988) 年 3 月 上原賞 (上原記念生命科学財団)</p> <p>平成 2 (1990) 年 6 月 日本学士院賞</p> <p>平成 3 (1991) 年 8 月 チャールズ・トム賞 (米国工業微生物学会)</p> <p>平成 7 (1995) 年 6 月 藤原賞</p> <p>平成 7 (1995) 年 4 月 米国工業微生物学会功績賞</p> <p>平成 7 (1995) 年 9 月 放線菌学会特別功績功労賞</p> <p>平成 9 (1997) 年 11 月 ロベルト・コッホ ゴールドメダル (Robert Koch Gold Medal (独国))</p>		

平成 10 (1998) 年 1 月 プリンス・マヒドン賞 (Prince Mahidol Award) (タイ国)
平成 12 (2000) 年 3 月 ナカニシ プライズ (Nakanishi Prize) (米国化学会-日本化学会合同)
平成 17 (2005) 年 3 月 アーネスト・ガンサー賞 (Ernest Guenther Award in the Chemistry of Natural Products) 米国化学会)
平成 19 (2007) 年 4 月 ハマオ・ウメザワ記念賞 (Hamao Umezawa Memorial Award) (国際化学療法学会)
平成 22 (2010) 年 6 月 テトラヘドロンプライズ (Tetrahedron Prize for Creativity in Organic Chemistry)
平成 23 (2011) 年 9 月 アリマ賞 (国際微生物学連合)
平成 24 (2012) 年 11 月 文化功労者
平成 26 (2014) 年 10 月 カナダ・ガードナー国際保健賞
平成 27 (2015) 年 1 月 朝日賞

大村 智教授（北里大学北里生命科学研究所教授）



大村 智（おおむら さとし）（80歳） 北里大学特別荣誉教授

【略歴】

昭和29年（1954年）3月	山梨県立韮崎高等学校卒業
昭和33年（1958年）3月	山梨大学学芸学部自然科学科卒業
昭和38年（1963年）3月	東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和38年（1963年）4月	山梨大学工学部発酵生産学科助手
昭和43年（1968年）10月	北里大学薬学部助教授
昭和50年（1975年）4月	北里大学薬学部教授
昭和59年（1984年）5月	（社）北里研究所理事・副所長
平成2年（1990年）6月	（社）北里研究所理事・所長
平成13年（2001年）4月	北里大学北里生命科学研究所教授
平成20年（2008年）4月	（学）北里研究所名誉理事長
平成23年（2012年）7月	（学）北里研究所顧問
平成25年（2013年）3月	北里大学特別荣誉教授

大村 智 教授（北里大学生命科学研究所教授）の研究成果

大村教授は、静岡県の土壌より放線菌 (*S. avermectinius*) を発見し、米国メルク社との共同研究で1979年にこの放線菌が生産する抗寄生虫薬エバーメクチン (Avermectin) および、ジヒドロ誘導体イベルメクチン (Ivermectin) を発見・開発した。

イベルメクチンは、動物薬として1981年に発売され、今日まで世界で最も多く使用され、食糧の増産や皮革産業の発展に多大な貢献をした。

さらに、イベルメクチンのヒト用製剤メクチザン (Mectizan、商品名) は、1987年よりWHOおよび関連機関による2つの重篤な熱帯病、オンコセルカ症とリンパ系フィラリア症の撲滅プログラムにメルク社と北里研究所から無償供与され、毎年約3億人が服用している。既に中南米ではオンコセルカ症は撲滅を達成しており、目下、アフリカにおいて本プログラムが大きく展開されており、多大な成果を挙げている。前者は2025年に後者は2020年に撲滅を達成できると予測されている。

現在でもエバーメクチンは大村教授が発見した放線菌 (*S. avermectinius*) によってのみ工業的に生産されている。また、この抗生物質生産菌のゲノム解析に取り組み、2000年に抗生物質生産菌としては世界に先駆けて成し遂げた。この成果は、現在活発に研究されているゲノムマイニングによる新規物質製造技術の基礎となった。

1985年には世界で初めて遺伝子操作による新しい抗生物質を創製し、微生物創薬の発展の礎を築いた。

上記のエバーメクチンの他、種々の独創的な探索系を構築し、500種の新規天然有機化合物を発見した。この中には抗がん剤開発の基となり、また、ノーベル賞受賞者等の多くの生命科学の研究者に使われ、生命現象の解明に多大な貢献をしているプロテインキナーゼ阻害剤、スタウロスポリン (Staurosporine, 1977年)、プロテアソーム阻害剤、ラクタシスチン (Lactacystin, 1991年)、脂肪酸活性化酵素阻害剤、トリアクシン (Triacsin, 1986年) などがある。

以上のように、大村教授は人類の健康と福祉の向上と科学の発展に多大な貢献をしており、また、微生物創薬の発展に極めて大きなインパクトを与えている。